正宗白鳥

夏目漱石論

夏目漱石論

一

私はこの頃、はじめて『虞美人草』を読んだ。この長篇小説は、夏目漱石が朝日新聞に入社最初の作品で、森田草平氏は、「明治大正文学全集」に添附された解題において、「この作品は、先生が入社後京都に遊んで、帰来直ちに筆を執られたもので、即ち純粋に作家として世に立たれた道程の第一歩で、先生としても比較的この一

篇に力を注がれたらしく、想いを構うること慎重に、プロットの上からいっても一糸乱れず、文章からいっても実に絢爛(けんらん)と精緻を極めたものである」といっている。

この批評は当っている。プロットが整然として、文章も絢爛と精緻を極めていることは、誰れにでも認められる。この一篇だけを例に取っても、漱石が近代無比の名文家であることは、充分に証拠立てられる。それでは、「虞美人草は読んで面白かったか」と訊(き)かれると、私は、言下に否と答える。「私にはちっとも面白くなかった。読んでいるうちは退屈の連続を感じた」と、私は躊躇す

るところなく答える。

漱石は、独歩などと違って、文才が豊かで、警句や洒落が口を吐(つ)いて出るといった風であるが、しかし、私には、そういう警句や洒落がさして面白くないのだ。『猫である』は、作者が匠気(しょうき)なく野心なく、興にまかせて書きなぐったところに、自然の瓢逸滑稽(ひょういつ)の味(あじわ)いが漂っていて面白かったが、『虞美人草』では、才に任せて、詰まらないことを喋舌(しゃべ)り散らしているように思われる。それに、近代化した馬琴といったような物知り振りと、どのページにも頑張っている理窟に、私はうんざりした。

馬琴の竜の講釈でも虎の講釈でも、当時の読者を感心させたのであろうし、漱石が今日の知識階級の小説愛好者に喜ばれるのも、一半はそういう理窟が挿入されているためなのであろう。

「気燄（きえん）を吐くより、反吐（へど）でも吐く方が哲学者らしいね。」

「哲学者がそんなものを吐くものか。」

「本当の哲学者になると、頭ばかりになって、ただ考えるだけか、丸で達磨だね。」

哲学者を評した警句として、読者が感心するのか知れないが、私には、ちっとも面白くない。

「そよと吹く風の恋や、涙の恋や、嘆息(ためいき)の恋じゃありません。暴風雨(あらし)の恋、暦にも録(の)っていない大暴雨(おおあらし)の恋、九寸五分の恋です。」

「九寸五分の恋が紫なんですか。」

「九寸五分の恋が紫なんじゃない。紫の恋が九寸五分なんです。」

「恋を斬(き)ると紫色の血が出るというのですか。」

「恋が怒ると九寸五分が紫色に閃(ひか)るというんです。」

こういう気取った洒落は、泉鏡花の小説のある部分と同様に、私に取っては、ちんぷんかんぷんである。

長篇『虞美人草』の前半は、こういう捉えどころのない、美文で続くのだからたまらない。私はさきに、漱石を無類の名文家といったが、名文家というよりも美文家といった方が、一層適切である。とにかく、彼れは美文的饒舌家である。三語楼などが連想される。

こういう余計なものを取り去ってしまって、小説のエッセンスだけを残すと、藤尾と彼女の母、甲野、小野、宗近（むねちか）など、数人の男女の錯綜した世相が、明確ではあるが、しかし概念的に読者の心に映ずるだけである。女性に対する聡明なる観察はある。人生に対する作者の考察

も膚浅(ふせん)ではない。しかし、この一篇には、生き生きした人間は決して活躍していないのである。思慮の浅い虚栄に富んだ近代ぶりの女性藤尾の描写は、作者の最も苦心したところであろうが、要するに説明に留まっている。謎の女にしてもそうだ。宗近の如きも、作者の道徳心から造り上げられた人物で、伏姫(ふせひめ)伝受の玉の一つを有(も)っている犬江犬川の徒と同一視すべきものである。『虞美人草』を通して見られる作者漱石が、疑問のない頑強なる道徳心を保持していることは、八犬伝を通して見られる曲亭馬琴と同様である。知識階級の通俗読者が、漱石の

作品を愛誦（あいしょう）する一半の理由は、この通常道徳が作品の基調となっているのに本（もと）づくのではあるまいか。

私は、最近、菊池寛君の『新珠（にいたま）』など、二、三の通俗小説を読破したので、連想がそれらの小説に及んだが、藤尾や糸子、あるいは二、三の青年の如き男女を表現している点では、むしろ、菊池君などの方が傑（すぐ）れているのである。わが仏尊しと見る偏見を離れて見るがいい。『虞美人草』の小説的部分は、通俗小説の型を追って、しかも至らざるものである。……しかし、漱石の大作家たる所以は、その通俗小説型の脚色を、彼れ独得の詩才で磨

きをかけ、十重二十重（とえはたえ）の錦の切れで包んでいるためなのであろう。私の目には、あまり賞味されない色取りであるが、他の多くの人々は、その錦繍（きんしゅう）の美に眩惑されるのであろう。美辞麗句が無限に続いているように思われるのであろう。

馬琴は、「饑（う）ゑたるものは食を撰（えら）ばず、逃ぐるものは道を撰ばず、貧しきものは妻を撰ばず」といったような、格言じみた気取った文句で、一回一章を書きはじめることがあったが、『虞美人草』は、こういう癖を有っている。「蟻（あり）は甘きに集まり、人は新らしきに集る。文明の

民は激烈なる生存のうちに無聊(ぶりょう)をかこつ……」（十一回）「貧乏を十七字に標榜して、馬の糞馬の尿(いばり)を得意気に咏(えい)ずる発句というがある……貧に誇る風流は今日に至っても尽きぬ」（十二回）などの書き出しは、今日の読者には、古めかしく思われるだろう。宗近と妹との対話、藤尾と母親との対話など、サクリサクリと歯切れがよくって、なかなか巧みなのだが、例の説明の邪魔が入るので、折角の興が醒まされがちになる。

要するに、『虞美人草』は、最初の新聞小説であるがために、雑誌に掲げられるために執筆されていたそれま

での小説とは、作者の心構えが自(おのず)から異って、そこに作為の跟(あと)が現れ、作者の欠点を暴露することにもなったのであろう。何としても冗漫だ。新聞の読者がよくもこういう長ったらしい随筆録漫談集を、小説として受け入れて、辛抱して読み続けたものだと、不思議に思われる。今日の時世では、朝日新聞のような新聞でも、こういう長篇小説を安んじて掲載してはいられないであろう。

私は、『三四郎』という小説を、半歳ほど前にはじめて読んだのであったが、これは、『虞美人草』ほどに随筆的美文的でなかったに関らず、一篇の筋立てさえ心に

残っていない。読者を感激させる魅力のない長篇小説を読み通すことのいかに困難なるかを、その時感じたことだけ、今思い出している。

二

森田草平氏の『煤煙（ばいえん）』が朝日新聞に連載されて、評判になっていた時分のことである。ある日、私は、博文館の応接室で、田山花袋、岩野泡鳴両氏と雑談に耽っているうち、談たまたま『煤煙』の価値に及んで、誰れかが

非難の語を挿んでいたが、
「しかし、漱石の比じゃない」と、泡鳴は例の大きな声で放言した。
「それはそうだね」と、花袋は軽く応じた。
私は、黙っていたが、心中この二氏の批評に同感していた。「漱石の比じゃない」という評語を、今日の読者が読んだら、「草平の作品は漱石には及びもつかない」という意味に解するかも知れないが、あの頃なら、その評語は、「煤煙は、評判ほどのものではないにしても、漱石物のような詰まらないものではない」という意味に

受け入れられるのであった。それほど、あの頃の漱石は、一般の読者には盛んに、歓迎されていたに関らず、文壇からはおりおり侮蔑の語を投げられていた。泡鳴の如きは、最も勇敢に漱石や鷗外を蔑視して、「二流作家」呼(よば)わりをもしていたのであった。人間の栄枯盛衰、毀誉褒貶(きよほうへん)の定めがたきことは、ここにもよく現れているので、漱石の作品は、死後年を追うて、ますます世上にのさばり返って、泡鳴の作品は、この頃たやすく手に入れることの出来ないくらいに埋没されている。それは、作品の真価の齎(もたら)す自然の結果なのであろうか。私は断じてそう

は思わない。私自身の好悪を別にして、漱石の蔚然(うつぜん)たる大作家たることは否定し得ないのであるが、しかし、泡鳴が漱石などとは異った素質を有った傑れた作家であったことも否定し得られないと思う。泡鳴の作品は今日の一般の読者に認めらるべく、あまりに深いところを持っているのではあるまいか。

世界の文学の種類は千差万別である。批評家や読者の好みもさまざまである。私にはおのずから私の好みがあって、それはいかんともし難いのである。たとえば、明治の中期以後、特異の作風によって、一部の文学愛好者

に熱愛され、目まぐるしい文芸思潮の動揺変遷の間にも、堅くおのれを持していた泉鏡花氏の作品については、私は縁なき衆生といっていい。幼少の頃から、いろいろな文学に親しんで来た私も、鏡花氏などの作品を鑑賞する素質を、生れながらに欠いでいるのかも知れない。

そういうと、「自然主義を信奉している作家には、鏡花氏の芸術が分るはずがない」と、旧套的評語が、鏡花贔屓（びいき）の人々から下されるであろう。しかし私は、文学における自然主義の信仰者であるかないかは別問題として、かなり種類の異った文学を翫賞（がんしょう）して来た。哀傷の

文学をも詠歎の文学をも、怪奇の文学をも、濃艶（のうえん）な文学をも、淡彩の文学をも、みなそれ相応に愛誦して来た。私は、長い間歌舞伎芝居に惑溺（わくでき）したこともあった。『即興詩人』に心魂を蕩（とろ）かされたこともあった。かつて『隅田川』を読んで恍惚としたこともあった。青年期においてさえ、落寞（らくばく）たる実生活を経験していた私は、芸術の世界においては、人一倍現実を離れた夢をそこに見ていたかも知れなかった。父祖の遺伝や環境からいっても、芸術的才華を身心に具えていないに違いない私は、自ら豊かな夢を描く力に欠けていて、貧寒な文章をのみ書きつ

づけて今日に至ったのであるが、自分の描かんとして描き能(あた)わざる美しい夢を描いた文学を愛好することは、人後に落ちなかったと思っている。しかし、鏡花氏の文字によって描かれた夢の世界は、私には窺い得られざる別の天地である。氏の文字や着想は、すべて私の翫賞慾を跳ね返して、氏独特の世界へ私を入れさせないのである。殆んど、一章をも一節をも快くは読み得られないのである。……氏の讃美者のいろいろな評語も、私に取っては、いつも空言としか思われない。したがって、明治以来の知名な作家の重(おも)な作品は大抵読破したつもりの私も、鏡

花氏のだけは、いくばくも読んでいない。読もうとしても読めないのである。

それでも、氏の初期のものは、昔幾篇かを通読した。そして、『照葉狂言』『湯島詣』『夜行巡査』『高野聖』『琵琶伝』など、初期の作品は、氏のその後の作品よりも、鏡花臭があくどくなくって、純真素朴で、芸術として傑れているのではあるまいかと、ひそかに思っている。

私の学生時代には、当時の新進作家のうちで泉鏡花の名声が最も光っていた。島村抱月氏主宰の下に、我々数人の文科生によって催された合評会で、最初に撰んだも

のは、『新小説』所載の鏡花氏の『注文帳』であった。私が世間に発表した最初の文章は、この『注文帳』の批評であった。私はまた、その頃数人の級友とともに、鏡花氏を訪問したことがあった。島村氏も、しばしば鏡花氏を推讃していた。欧洲留学から帰朝した後、間もなく島村氏は、当時の文壇の不振について批判を加えているうち、「しかし、鏡花だけは、他の凡庸の徒とちがっている」といって、文芸倶楽部（クラブ）所載の『霊象（れいぞう）』と題された彼れの新作を称讃した。

年少の頃には、人はたやすく周囲にかぶれるものであ

る。自然主義流行の時代にでも、マルクス主義流行の時代にでも、周囲が騒がしく囃(はや)し立てていると、年少の徒は、それ以外に真理はないと思って雷同するのである。確信をもって異を樹(た)つることは難い。私も、鏡花讃美の声を、左の耳からも右の耳からも聞かされていると、訳も分らずに、正体も分らずに、鏡花のえらさに感歎しなければならない気持になることもあった。多数の拝む偶像をば、われも拝みたくなるのが、人間通有の面白い心理らしい。鏡花漱石など二、三の文人について、私自身の経験した些細なことも万般の世相に広く押し及ぼして

見ると面白いのである。

私は、今、新潮社出版の「現代小説全集」中の泉鏡花集を取り出して、久し振りに鏡花氏の作品に目を触れた。しかし、相変らず読むに堪えぬのである。何となく名文らしい感じがするだけで、私の心に響くところは少しもないのだ。巻頭の『玄武朱雀（げんぶしゅじゃく）』は、ひどくイナセな景気のいい書きっ振（ぶ）りだが、この鏡花式ともいっていい調子づいた文章が、私には快く受け取れない。有り振れた平坦な写実的描写を試みないのが、この作者の特色であるが、異常な特色を有った文学は、それを受け入れるに

足る素質を備えた少数の読者にのみ翫賞されるのであろう。『玄武朱雀』を努力して読み通した私はこの調子づいた文章において、作者がうしろ鉢巻でステテコを踊りつづけているのを見るような感じがした。

『国貞画く』は、久し振りに帰省した男が旧知を訪ねる道すがらの追憶などに、情趣が豊かに漂っている訳なのだが、それでさえ、文章がいやに踊っていて、感じが私の心に伝わって来ない。『白鷺（しらさぎ）』の如きは、優にやさしい女性の心を現しているらしいのだが、曲りくねった文章に、私の神経はじらされるばかりであった。……まだ

しも初期の文章の方が、いやみがなかったのではあるまいか。

私は、昔の鏡花氏の小説のうちに、酒宴の席に、雛妓（すうぎ）か誰れかが入って来たのを形容して、「池田の宿から朝顔がまいって候（そうろう）」と書いてあったのを、よく思い出すのである。含蓄のある洒落で、鏡花式修辞法からいえば、一つの標本的名文句としていいのであろうが、私の心は、こういう表現法にはどうしても従って行けないのである。

三

夏目漱石は、泉鏡花を非凡な作者として推称していたそうである。そういえば、漱石の文章には、鏡花と似たようなところがないでもない。『虞美人草』のなかに散乱している洒落や警句には、鏡花の文章から受ける感じに似通ったものがある。一種のくさみをもった気取りである。

これら二氏を、旧式の文学分類法により、「ロマンチシズムの作家欄」に収めて観察すると、両者の間にいろ

いろな類似を見出し得られるのであるが、しかし、それは皮相な類似であろう。

私は、『虞美人草』以前の漱石の作品は、少なくも過半は、発表当時に通読している。そして、運筆が自由自在で、千言立ちどころに成るといった文才を不思議に思った。『カーライル博物館』とか、『倫敦塔（ろんどんとう）』とかを読んで、名文章として感心していた。当時の文壇には、鷗外以外には、こういうどっしりした文章を書く人はなかったのだが、鷗外はもっと骨っぽくて、漱石ほどの滋味を欠いでいた。『草枕』を二日で書き上げたとか、『二

百十日』を一日で脱稿したとかいう噂を聞いて、その筆の速さに驚いたこともあった。しかし、『二百十日』だの『琴のそら音』だのは、小説としては詰まらないものだと、発表当時に、私はそう思ったのであったが、当時の読後感を、私は今も改めようとは思っていない。『倫敦塔』や『草枕』などが、漱石の天分と修養とをよく発揮した作品であって、世相の描写や、人間そのものの真相を掘って行く力は、当時の彼れには、まだなかったのであった。四十近くなってから筆を取り出した彼れの作品には、『舞姫』も『うたかたの記』もなかった。青春

の悩みなどは、彼れはついに描かないで済んだ。

漱石は、よくも悪くも、『虞美人草』から、小説道に踏み込んだのであった。妙なもので、小説を自己畢世（ひっせい）の職業とすることに極ると、左右前後の人生を、小説家的眼光をもって見廻すようになるのである。それで、以前は、淡々として、俳句か俳体詩でもつくるような気持で、心のままに筆を動かしていた漱石も、（意識的にか無意識的にか）新たなる態度で、左右を見るようになった。彼れは、朝日新聞のお雇い作家となったがために、一歩一歩人生を深く広く見るようになったのである。聡明炯（けい）

眼(がん)な彼れは、たとえ多く書斎裡に跼蹐(きょくせき)していても、門下生や崇拝者に取り巻かれて、太平楽をいっていたとしても、魯鈍な観察に安んじていなかった。人間のいろいろな心理を見る目は光っていた。『虞美人草』は、前期の漱石の趣味に蔽(おお)われて、小説的人物は、ただお粗末な形を具えているに留まっているのだが、それからはじまって最後の『明暗』まで、彼れの小説道の努力は続いた。

しかし、四十以後に小説修業の途に上った彼れは、根本において変化を来すことはなかった。時代の流行に附和雷同することもなかったし、左顧右眄(さこうべん)煩悶苦悩すると

ころもなかった。乙女小説から『蒲団(ふとん)』に転じた田山花袋のような自己革命など無論経験しなかった。

彼れの小説の見本は、初期の『坊つちゃん』において決定されているのであった。『猫』とともに、最も広く読まれている小説で、私も三、四度読んでいる訳である。先日本郷座の舞台に上演されたのをも見た。読んでも面白かった。芝居でも面白かった。通俗小説としても、通俗劇としても、しめっぽいところのない、明るいお目出たい、懐疑のない、健全なものであった。漱石が日本の国民的作家となっている所以もここにあるのであろう

か。英国の国民的作家として先日逝去したトマス・ハーディが暗澹(あんたん)たる運命観を保持していたのとはちがっている。漱石を愛敬する日本の国民性は、しかく、明るくっておお目出たくって、懐疑のない健全なものなのであろうか。外来の自然主義風の文学が、地味の適しないところに播かれた種子の如く、発育不良で繁茂しなかったのも、その訳なのであろうか。

私は、『猫』のまだ世に現れない以前、漱石がまだ無名作家であった時分、彼れに関する短評を、読売新聞に掲げたことがあった。それは、「源兵衛村から誰れとか

が大根を持って来た」というような剽軽（ひょうきん）な俳体詩を、『ホトトギス』誌上で読んで感心したためであった。

当時、私は新聞記事の材料を得るために、近所の畔（くろ）柳芥舟（やなぎかいしゅう）氏をおりおり訪問していたので、ある日、氏に向って、俳体詩の話をすると、氏は、それに連関して、漱石の人となりを、いろいろ私に話して聞かせた。彼れが読書家であること、世間的名誉の外に超然としていることなどを話して、畔柳氏自身、彼れに敬服しているらしい口吻（こうふん）であった。「高浜君と俳体詩なんかをやっていい気になってる」といっていた。これによって見ても、

漱石は、無論、他の多くの文学者の如く文筆を以って世に立とうとする考えはなかったのだと察せられる。鷗外や上田柳村（りゅうそん）とも異っていた。私が読売新聞で、漱石を讃美し、柳村を貶（けな）した筆法を弄すると、柳村は、「積極的に何かやろうとするものを非難して、消極的な生活に甘んじているものを褒めるのはいいことであろうか」という意味のことを、私にいった。しかし、間もなく、漱石は急転直下の勢いで世上に活躍しだした。

当時の読売新聞の主筆であった竹越三叉（たけこしさんさ）氏は、漱石招聘（しょうへい）を企てて、自分で交渉に出掛けたようであったが、

私も一度主筆の命を奉じて駒込の邸宅に漱石を訪問した。新聞記者として訪問ずれのしていた当時の私は、学生時代に鏡花訪問を試みた時のような純な気持は失っていて、「お役目に訪ねて来た」という感じを、露骨に現したらしかった。部屋の様子も、主人の態度も話し振りも、陰影で冴えなかった。『草枕』を発表して名声嘖々（さくさく）たる時であったのに関らず、得意の色は見えなかった。

「竹越さんが先日訪ねて来たが、僕を先生といっていた。しかし、竹越さんの方が僕よりも年上じゃないだろうか」

「小説を書きだしてから、丸善の借金は済ました」と、

興もなげにいったことだけは、今もなお覚えている。その時坂元雪鳥君が来ていたが、この人の話の方が元気がよくって座が白けないで済んだ。読売入社の件は無論駄目であったが、間もなく日曜の文学附録へ、一篇の評論を寄稿されたのが、漱石が読売に対する寸志と見るべきであった。

例の畔柳氏にこの話をすると、「漱石が新聞社なんかへ入るものか」と、頼みに行く方が馬鹿だといわぬばかりにいって、笑った。私はなるほどと同感した。

ところが、それから、半年も経たぬ間に、夏目漱石先

生は、堂々と朝日新聞社に入社した。私は意外に感じた。人は、処世上の利害の打算によってどうにでも動くものである。あの人に限ってそんなことはないと断言するのは浅墓な考えである。漱石先生といえども例外であるはずがない。竹越氏は私に向って、「漱石は、読売入社については不安を感じているらしいが、社では約束は確実に守る。本野(もとの)一郎君に僕からそういって、将来の地位の安全は保証する」といったが、そういう言葉をそのままに受け入れるべく漱石は、あまりに聡明であった。読売では前途に不安を感じて、乗り気にならなかった彼れが、

朝日ならと乗り出したところに、彼れの人生観察の目の動きが見られる。

島村抱月は、その頭脳の聡明さにおいては漱石に劣らなかったが、晩年一婦人の愛に惑溺して常道を逸した生活を過した人ほどあって、あまく調子に乗って利害を見る目のくらむことがあったらしかった。衆人の期待を荷(にな)って欧洲留学から帰朝した時、読売では、かねての関係もあることだから、彼れの助力を待ち設けていたのであったが、彼れは、容易に日日新聞の招きに応じた。当時は文芸には縁のなかったその新聞を舞台として、自己の

勢力を扶植しようとした。おれが出れば不適当な舞台でも生かして見せると気を負っていたのであった。ところが、満一年を過ぎると無雑作に社の方から断られてしまった。その頃私は伊原青々園（せいせいえん）氏に聞いた。氏は抱月に忠告して、「君は日日のような場所違いの新聞に書くよりもやはり読売に書いた方がいいじゃないか」といったが、彼れは、自信あるらしく、忠告に耳を傾けなかったそうであった。抱月よりも漱石の方が、自己と周囲との観察において用意周到であった訳だ。

四

『坊つちゃん』は、筆がキビキビしているのと、例の美文脈の低徊味よりも、事件の運びに富んでいるのと、主人公の人となりがキビキビしているので、万人向きの小説になっている。大抵の人に面白く読まれそうである。『不如帰』や『金色夜叉』などよりも、いやみがなくって、いい通俗小説である。しかし、ここに現れているいろいろな人間は型の如き人間である。ここに現れている作者の正義観は卑近である。こういう風に世の中を見て

安んじていられればお目出たいものだと思われる。

漱石がモウパッサンの『首飾り』を非難した講演録を読んだことがあったが、そこに含まれていた非難の個所は、このフランスの作家が、作中の薄給者夫妻の長い間の苦辛を無意味なもののように取り扱った点にあった。モウパッサンに対する道徳の立場からの非難は、トルストイによって、峻烈に下されたのであって、そういうところに、いろいろな文学者の見解の相違が見られて面白いのであるが、トルストイ自身の描いた人間は、漱石の描いた人物のように、やすやすと道徳の支配を受けるほ

ど薄手ではなかった。そしてトルストイの道徳観は、彼れの深い悩みと表裏していた。『坊つちゃん』に現れた漱石のそれのように安価ではなかった。

漱石の大部の『文学論』集や『文学評論』集は、彼れの学殖と批判力とを充分に現したもので、文学研究者を裨益（ひえき）する良書である。私は学ぶところが少なくなかった。「英国十八世紀の文学評論」は、日本人の観察した西洋文学観として、これほど委曲を尽したものは、他に類がないだろうと思われる。私としては、漱石が小説は書かないでも、この調子で、英国各時代の文学史を書き残し

ていたなら、もっと有難かったと思っている。

『文学論』集の序文において、彼れは、こういっている。

「倫敦（ロンドン）に住み暮らしたる二年は、尤も不愉快の二年なり。余は、英国紳士の間にあつて狼群に伍する一匹のむく犬の如く、あはれなる生活を営みたり。……帰朝後の三年有半も亦（また）不愉快の三年有半なり。去れども、余は日本の臣民なり。不愉快なるが故に日本を去るの理由を認め得ず。日本の臣民たる光栄と権利を有する余は、五千万人中に生息して、少くとも五千万分の一の光栄と権利

を支持せんと欲す。此(この)光栄と権利を五千万分一以下に切り詰められたる時、余は余が存在を否定し、若(もし)くは余が本国を去るの挙に出づる能(あた)はず、寧ろ力の尽く限り、之を五千万分一に回復せんことを努むべし。是れ余が微少なる意志にあらず、余が意志以上の意志なり。……英国人は余を目して神経衰弱と云へり。ある日本人は書を本国に致して余を狂気なりと云へる由。……帰朝後の余も、依然として神経衰弱にして兼狂人のよしなり。親戚のものすら、之を是認するに似たり。……余が身辺の状況にして変化せざる限りは、余の神経衰弱と狂気とは、命の

あらん程永続すべし。……」

こう鬱勃（うつぼつ）たる不平を述べている。『猫』その他の随筆録においてでなく『文学論』の序文において、精神の悩みを直截に述べているのは面白い。そして、神経衰弱にして狂人なるがため『猫』や『漾虚集』や『鶉籠（うずらかご）』を著したと、皮肉をいっている。

「十八世紀文学論」のうちでは、スヰフト論が最も光彩を放っていて、これほど微細にかつ鋭利に、スヰフトを解剖し観察し翫賞したものは、英国においてもないに違いない。サッカレーやハズリットなどのスヰフト観も、

漱石に比べると見方が皮相である。そして、漱石は、この稀代の諷刺家厭世家スヰフトを非常に高く評価している。「不満足を現わす文学的表現」の階段を四種に分ちていろいろに例を挙げたあと、スヰフトをもってそのどん詰まりとしている。

「普通の不満足は必ず一方に満足を控えている。もしくは夢見ている。スヰフトの不満足にはこの対立がない。……過去現在未来を通じて、古今東西を尽くして、苟もしくも人間たる以上は、悉く嫌悪すべき動物であるという不満足である。従って希望がない。救われようがない。

免かれようがない。彼れの諷刺は噴火口から迸(ほとば)しる氷のようなものである。非常に猛烈であるけれども、非常に冷たい。人を動すための不平でもなければ、自ら免れるための不平でもない。どうしたって世界のあらん限りつづく、不平のための不平だから、スヰフト自身はかつて激していない。冷然平然としている。何だかスヰフトなるものが重たい石のように英国の真中に転がっているような気がする。そうしてこの石が一つあるために、左右前後は無論、全世界に蠢動する人間と名のつくものが、悉く石に変化したように思われる。なぜというと、彼れ

は如何に憎悪の意を洩らしても決して赤くならない。また決して慇懃(いんぎん)にも出ない。同情は固(もと)よりない。……」

漱石の見たスヰフトは、通俗の文学史家の見たような浅薄皮相な諷刺家ではないのである。古今東西の文学史に散在している諷刺家や厭世家は、大抵は一方で甘い夢を見ているので、彼れと心を同じゅうして見ていると、世界の殆んど凡(すべ)ての文学者が甘ちゃんなのである。馬琴の『夢想兵衛(むそうびょうえ)』などは、『ガリヴァ旅行記』に比べると、お話にならないほど卑俗であり膚浅(ふせん)である。そして、漱石の所論を熟読していると、彼れはスヰフトを客観的に

研究し解剖しているだけではなくって、スヰフトの見解にかなり同感し共鳴しているのではないかと疑われる。そうでなければ、ああまで深くスヰフトの心境に立ち入った傑れた批評が出来る訳はないと私には思われる。

しかし、一部分だけでもスヰフトと心を同じゅうしている漱石が、自分の創作においては、なぜ『坊つちゃん』の如き、通俗的小説を書くのであろうか。留学中にも帰朝後にも満腔(まんこう)の不平を抱いていたはずの彼れの鬱憤(うっぷん)はこんな小説で洩らされる程度であったのか。……私は、漱石の創作に現れている彼れの心理について、少なからぬ

興味を覚えだした。鷗外は聡明至極で筆致も明快であったが、心の働きが単純であった。漱石は複雑である。

彼れは、生真面目に堂々とスヰフトを論じているうちにも、時々おひゃらかしをいったり、忘れていたものをふと思い出したような態度で卑近な道徳に拘泥（こうでい）した口吻（こうふん）を洩らしている。ここらが、譲歩のない冷静なスヰフトとは違った漱石の真面目なのであろうか。彼れは、『ドンキホテ』についても、「多数の評家は諷刺と見るようだが、私には花見の鬘（かつら）同様な感がある」と、おひゃらかしている。

五

私は、『それから』を改めて読んだ。

この長篇は二年ほど前に、帰省の途上、汽車のなかで通読して、直ちに簡単なる読後感を読売に寄稿したのであったが、作品から受けた印象は間もなく私の頭から全く消え失せていた。それほど感銘の薄い作品であった。

しかし、この小説は、漱石の作中でも、殊に深刻味のあるものとして、知識階級の読者に推讃されていると聞

いたので、今度改めて読み直したのである。

『虞美人草』を読んだあとで、『それから』を読むと、この作者の小説構成術の進歩が見られる。前作では、小説らしいところはぽっちりしかなくって、随筆風の低徊趣味が果てしなく跋扈(ばっこ)していたのであったが、後作では、全篇の初中後がもっと有機的に構成されている。作中人物のそれぞれがもっと現実の姿を備えている。しかし、私には、最初読んだ時にまさった興味は感ぜられなかった。

『虞美人草』でも『彼岸過迄(ひがんすぎまで)』でも、『心』でも、ある

いは『明暗』でも、漱石の長篇小説の作風は、後に何か奇抜なことが出て来そうに読者に期待させながら、くどく長く読者を引(ひき)ずって行くので、読者には辛抱が入る。凡庸な作者は、読者を釣って行くだけで、最後に玉手箱から取り出された手品の種は案外詰まらないことが多いのだが、漱石の玉手箱には、いつも相応に見事なものが潜められている。『それから』にも、主人公代助が友人の妻三千代に対する心理の交錯に、読者の心を充分に捉える力を有っているのである。彼れの胸に潜んでいた秘密を、女の夫や、父や兄や兄嫁や読者の前にさらけ出し

た時には、彼れの人生は混乱し、「世の中は真赤」になる訳である。……ところが、作者が筆を尽しているにかかわらず、事相が私には空々しく思われて、胸を抉(えぐ)られるような感じがしないのだ。私ばかりがそうなのであろうか。

「代助は西洋の小説を読むたびに、そのうちに出て来る男女の情話があまりに露骨で、あまりに放肆(ほうし)で、かつあまりに直線的に濃厚なのを平生から怪しんでいた。原語で読めばとにかく、日本には訳し得ぬ趣味のものと考えていた。従って彼れは自分と三千代との関係を発展させ

るために、舶来の台詞を用いる意志は毫(ごう)もなかった」といっているが、漱石は男女関係を描くにあたって、つねにこの心構えを棄てなかった。人倫五常の道義を表に振り翳(かざ)しながら、傍ら、忌憚(きたん)なく淫蕩(いんとう)の情景を描写していた馬琴とは違って、漱石はあくまでも品位を保っていた。それは彼れの創作の風格として尊重していいことなので、私は、漱石がモウパッサンなどの作風を真似なかったのを遺憾に思っているのではないが、『それから』の代助が、そんなに熱烈に三千代を恋しているようには思われないのである。代助の心は躍っていない。血は湧い

ていない。作者の頭は自在に働いて恋愛心理の経過においても、へまなことは書いていないのだが、どこまで行っても理詰めな感じがする。へまなところがなさ過ぎるので窮屈である。新聞小説執筆前の初期の作品、『猫』の如き、『草枕』の如き、『坊っちゃん』の如き、みんな、のびのびとしてゆったりしていたが、『それから』やその他の長篇小説は、くどく詳しく書かれているに関らず窮屈である。

「代助は泣いて人を動かそうとするほど、低級趣味のものはないと自信している。およそ何が気障(きざ)だって、思わ

せ振りの、涙や煩悶や、真面目や、熱烈ほど気障なものはないと自覚している」といっているが、彼れの創作の用意にはこの気持が厳守されている。普通の小説の書き振りに対する彼れの反抗心もここに微見している。

彼れ漱石も、ある意味で代助の如く、ニルアドミラリの域に達していたのであろう。……私はこう思う。彼れは、学究的職業から離れて、小説によって生活の料を得ることになって以来、当面の必要上、世間と人間の真相を考察し冥想して、それを机上に持って来たのであろうが、考察冥想の結果として得た人と人との間の愛慾や闘

争を、彼れは、つまりは、ニルアドミラリの目で見ていたのではあるまいか。彼れと同時代に自然主義作家として区別された花袋独歩藤村などは、案外傍観的や客観的の作家ではなくて、漱石の見方から判断すると、思わせ振りの涙や、煩悶や、真面目や熱烈を作品に傾注した、気障な作家であったのかも知れなかった。彼れがツルゲネーフ全集を読んでいるという噂を昔聞いたことがあったが、彼れはツルゲネーフにおいても、思わせ振りの気障な作家を見たかも知れなかった。

ニルアドミラリの極は、文学としてはスヰフトの域に

達しなければならぬ。彼れは一面そういう素質を有っていたらしいのだが、それを、徹底させなかった。……思わせ振りのもの気障なものを、思わせ振りのもの気障なものとして、スヰフト式に冷静にあるいは冷酷に、人間という生物（いきもの）の愚かしき行作（ぎょうさ）として描写しないで、尤（もっと）も らしく重みをつけて書いたのは、彼れの職業意識と、伝統的道徳癖とに由（よ）るのであろう。彼れは腹の底では、雑多紛々の色恋沙汰などに、尊い人生の意義を見たりしてなんかいなかったのであろうか。

深い人間心理を微細に取り扱ったいくつかの彼れの小

説を読むと、よく知っているのに感心されるが、いつも実感が欠けていて、生(なま)な人間らしいところが欠けているので、強く胸を打たれることがない。

何といっても、彼れの長篇小説のうちで生気に富んでいるのは『道草』である。『それから』なども、漱石の他の多くの小説の如く、頻(しき)りに道草を喰っている小説で、その道草が例の如く、アンドレーフの『七刑人』の説明だったり、ダンヌンチオの部屋の色の説明だったり、文学論だったり、社会観だったりして、ややもすると、小説の中へ雑録がまぎれ込んだのじゃないかと思われるの

だが、『道草』は、題は明らさまに道草を標榜していながら、内容は首尾を通じて、生々した人生記録なのである。

六

『門』を今度はじめて読んだ。

窓前の若葉を見上げては目を休めながら、半日足らずの時間で読み通した。逝く春の感ぜられるこの頃の時節には、私は毎年、「花よ花よと浮れぞめきし人の心も梢々（ゃゃ）

鎮まりて、一輪早咲きの躑躅(つつじ)花の上を、羽弱(はよや)の蝶の行き戻りする四月の末の春景色」という北村透谷の『宿魂鏡』の書き出しの一節と、「江南四月草萋々、千山花落杜鵑啼(こうなんのしがつくさせいせい せんざんはなおち とけんなく)」という、鷗外一派の翻訳詩集『面影』のうちに収められた平家物語鬼界ヶ島漢訳の一句を思い出すのを常例としている。これらの平凡な詞句にも、それを初めて愛誦した当時の、少年の夢が纏綿(てんめん)としていて、私には言い知れぬ懐しみが存するのである。我々の文学翫賞に夏目漱石は、作品それ自身の価値以外に、こういう読者各自の主観の色が添っているのである。

私は、『門』を机上に伏せては、窓外に淀んでいる懶(ものう)い春を眺めた。あるいは、漱石の他の文集にある『修善寺日記』や『思い出すことなど』を抜き読みして、小説以上の興味を感じた。漱石自身も職業意識の伴っている小説に筆を執るよりも、こういうものの方に、自己本来の趣味を感じていたのである。

標紗玄黄外、生死交謝時、杳然無寄託、懸命一藕糸、命根何処是、窈窕不可知、――――、孤愁来落枕、又揺蕭颯悲、仰臥秋已闌、苦病欲銀髭、寥廓天猶在、高樹空余枝、対此忡悵久、晩懐無尽期。〔縹渺(ひょうびょう)たる玄黄(げんこう)の外(そと)、

生死交ごも謝する時、杳然寄託無く、命を一藕糸に懸く、命根何れの処か是れなる、窈窕知る可からず、――、孤愁来たりて枕に落ち、又た蕭颯の悲しみを揺るがす、仰臥秋已に闌にして、病に苦しんで銀髭ならんと欲す、寥廓として天猶お在り、高樹空しく枝を余す、此れに対して忡悵すること久しく、晩懐尽くる期無し。」

病後に作られたこういう古詩を私は微吟した。そして、この詩人の気持がぴったり自分の気持に合うのを感じた。小説については、私の気持は何となく、彼れの気持とそぐわないところがあるように思われるのだが。……

しかし、『門』は、傑れた作品である。『それから』のように理窟責めのギチギチした小説ではない。『虞美人草』のような美文で塗り潰された退屈な小説ではない。漱石は、ここにおいてけばけばした美服を脱いで、袴も脱いで、平服に着替えて、楽々と浮世を語っている。例の今に面白いものを見せるぞといったように、読者を釣ろうとする山気がない。はじめから、腰弁夫婦の平凡な人生を、平坦な筆致で脈々と叙して行くところに、私は親しみをもって随(つ)いて行かれた。この創作態度や人間を見る目において、私は漱石の進境を認めた。――そう思

って読んでいた。ところが、しまいの方へ近づくと、この腰弁夫婦は異常な過去を有っていることが曝露された。私は、旧劇で、鱶七が引き抜いて金輪五郎になったのを見るようだった。安官吏宗助実は何某(なにがし)と変って、急に深刻性を発揮するのに驚かされた。友人の妻を奪った彼は、『それから』の代助の生れ変りのような気がした。そういえば、はじめから、何かの伏線らしい変な文句がおりおり挿まれていたのだが、他の小説とはちがって、『門』にはしみじみとした、衒気(げんき)のない世相の描写が続いていたので、私は、それだけに満足して、貧しい冴え

ない腰弁生活の心境に同感して、変な伏線なんかをあまり気にしなかったのであった。それほど柔順な読者であったために、後で作者のからくりが分ると、激しい嫌悪を覚えた。宗助が正体を現してからの心理も一通り書けているには違いないが、真に迫ったところはなかった。鎌倉の禅寺へ行くなんか少し巫山戯（ふざけ）ている。……作者はどの小説にもなぜこんな筆法を用いるのであろうか。腰弁宗助の平凡生活だけでいいではないか。作者はそれだけで世相を描き出し得る手腕を有っているのである。

思うに、責任感の強いこの作者は、新聞小説家として

読者を面白がらせなければならぬという職業意識から、こんな余計な作為を用いたのではあるまいか。初期の漱石は、水の流るる如く雲の動く如くに筆を運んでいた。『門』のはじめの方に、「いくら容易（やさし）い字でも、こりゃ変だと思って疑ぐり出すと分らなくなる。この間も今日の今の字で大変迷った。紙の上へちゃんと書いて見て、じっと眺めていると、何だか違ったような気がする。仕舞には見れば見るほど今らしくなくなって来る」と宗助にいわせているが、こういった感じは、私もおりおり経験することがある。日常の茶の間ばなしのうちにこんな

ことをいわせて置いて、最後に迷いを晴らしに禅寺へ行くのが、宗助の人となりとしてそう不調和でないように仕組んでいるなんか、この作者が脚色に抜け目のないことが察せられる。とにかく、構成の才は充分に有っている人なので、戯曲を書こうと思えば書けた人なのである。

この頃劇場で上演用の新脚本に欠乏しているため、盛名ある漱石の小説の戯曲化が流行しだした。『猫』のような、どこから見ても芝居にならないものまでも脚色しだした。やがて、彼れの他のいろいろな長篇小説が戯曲化されるのではないかと危(あやぶ)まれる。生前の漱石は夢に

も思わなかったことで、芝居嫌いの彼れが、地下で聞いたら、作品の神聖が傷(きずつ)けられたようにいやな顔をするだろう。

しかし、彼れの新聞小説には、お芝居じみたところがあるのだ。探偵小説じみたところもあるのだ。彼れは、探偵という者を嫌っていたに関らず、探偵小説を書き得る素質をも有っていた。『彼岸過迄』は、殊に探偵小説らしい分子に富んでいる。

彼れは、『門』を書いた後大病に罹って、暫(しば)らく新聞小説の筆を絶っていた。責任感の強い彼れは、お雇い作

家としての義務を怠っていたことを心苦しく思っていたらしい。「久し振りだからなるべく面白いものを書かなければ済まない」という気になっていた。俗受けを顧慮する気持が不断にも勝っていたことは、『彼岸過迄』に添えられた序文を読んでも察せられる。森鷗外が、日日新聞において、平然として、あの非通俗甚だしい考証的史伝を書き続けた気持とは大いにちがっている。

私は、数年前に一度通読したことのあるこの長篇を、今度読み直した。この小説は、この作者のどの小説よりも手の込んだもので、漱石の頭脳がいかに複雑に回転す

るかに驚かれる。前半の探偵趣味浪漫的探偵趣味、「異常に対する嗜欲（しよく）」の発揮は、彼れが愛読していたらしいスチーヴンソンなどから、暗示され啓発されたらしく思われるが、理智においてスチーブンソンより優れていた彼れは、『新アラビア物語』や『宝島』の作者のように、「異常」や「冒険」に陶然として心を浸しただけではいられなかった。自分で作った夢を、自分で破っている。ここには、鏡花趣味も含まれているが、漱石は白昼にタワイのない夢を見て、そこに安んじてはいられなかった。蛇頭を彫った異様な洋杖でも、女占い者の神秘らしい話

でも、条理明晰に取り扱れている。鷗外や漱石の小説を通して見る人生には、神秘不可解の影はないので、外の作者は知恵が足りないからそんなものを感じるのではないかと思われる。

「話が理窟張ってむつかしくなって来たね。あんまり一人で調子に乗って饒舌(しゃべ)っているものだから」と、作中の人物にいわせているのは、作者自身、あまりに独りよがりの心理解剖をし過ぎているのに気がついたための申し訳であって、「右か左へ自分の身体を動かし得ないただの理窟は、いくら旨(うま)く出来ていても、彼れには用のない

贋造紙幣と同じ物であった」と、他の人物にいわせているのも、作者自身読者の思惑を気にしたための照れ隠しであろう。

しかし、この小説のうちの「須永の話」は、今度も面白く読んだ。『虞美人草』の藤尾は、着物は派手に出来ているが肉体が作られていない。『それから』の三千代は、影が薄い。『門』のお米は日蔭の女らしく描かれているが、女性としての神経が通っていないような感じがする。……私は、「須永の話」を中心とした『彼岸過迄』において、はじめて、漱石の頭から描きだされた潑溂た

る女性を見るのである。それほど千代子はよく描かれている。温かい肉体を備えてそこに鮮やかに浮き出している。彼女に対する須永の嫉妬焦慮の気持も読者の胸に迫る力を有っている。今までの漱石の作中に現れていなかった気持である。私は漱石の人生観察心理解剖が、一作ごとに深くなって行くのを感じる。彼れは新聞小説を職業としたために、余儀なく人生研究に目を向け、その結果が自己の修養になったのである。

こういう性質の須永が千代子に対してこういう態度を取ったというだけで、一篇の好材料になる訳だが、この

作者は、例の如く二重にも三重にもひねくって、須永をある不幸な運命の下に置かれた男として、そこに須永の性癖の由って来たる原因を索った。

鎌倉で小鯵（こあじ）の一塩を食うことから、ふと話の筋を引き出して、「これはまだ誰れにも話さない秘密だが、実は単に自分の心得として、過去幾年かの間、僕は母と自分と何処（どこ）がどう違って、何処がどう似ているかの詳しい研究を人知れず重ねたのである――欠点でも母と共に具えているのなら、僕は大変嬉しかった。長所でも母になくって僕だけ有っていると甚だ不愉快になった。そのうち

で僕の最も気になるのは、僕の顔が父にだけ似て、母とはまるで縁のない目鼻立に出来上っている事であった」という須永の話を読むと、読者は作者のからくりに気がついて、また例の趣向かと微笑されるのである。

果して、須永は現在の母親の実の子ではなくって、早逝した父親が小間使に生ませた子であった。しかし、続けて読んで行くと、この事実が、さして痛ましい世相として読者を動かすほどには描かれていなかった。むしろ、須永出生の秘密に関する追窮はいい加減にして、千代子との交渉をもっと発展させて小説を進めた方が面白かっ

だのだが、それは漱石は、企てても為遂(なしと)げ得なかったかも知れない。

七

『彼岸過迄』の須永といい松本といい、『それから』の代助といい、『心』の先生といい、その他の作品中の某々など、漱石の小説には、かなりの資産を有っていて遊んで暮している高等遊民が多い。知識があって、暇があるのだから、ともすると、丹念に自己解剖に耽るのである。

そして、作中の老人は、詩会へ行ったり骨董を翫(もてあそ)んだり謡曲をやったりする。今日の文壇で盛んに論争されている社会意識は、彼れの小説には殆んど現れていないといっていい。しかし、彼れが、今日の世に働いていたなら、聡明なる見解をもってそれを取り扱っていたであろう。鷗外は、共産主義に関する歴史的研究をはじめたが、はじめたばかりで倒れた。彼れは旺(さか)んな知識慾によってそういうものを研究はしても、盲目的に時の流行に附随しなかったに違いなかった。「善とは家畜の群のような人間と、去就を同(おなじゅ)うする道にすぎない。それを破ろう

とするのは悪だ。善悪は問うべきではない。家畜の凡俗を離れて、意思を強くして貴族的に高尚に淋しい高いところに身を置きたいというのだ。その高尚な人間は仮面を冠っている。仮面を尊敬せねばならない」といったようなほこりを彼れは有っていた。しかし、漱石はもっと平民的であった。鷗外よりも豊かな芸術的天分は有っていたが、周囲を顧慮するところがあった。「成金の乱行を見ると、強盗が白刃(しらは)の抜身(ぬきみ)を畳に突き立てて良民を脅迫しているのと同じような感じになるのです……僕はこれほど臆病な人間なのです」と、いうような須永の手紙

の文句も、必しも作中の人物だけの心持ではないかも知れない。

『心』には、今までの作品のうちにも微見(ほのみ)えていた憎人厭世の気持が最も強烈に出ている。憎人厭世が自己嫌悪に達しているのである。「私は個人に対する復讐以上の事を現にやっているんだ。私は彼らを憎むばかりじゃない、彼らが代表している人間というものを、一般に憎むことを覚えた」といっている作中の人物は、ついに自分自身の憎さに堪えられないで自滅した。漱石の人間研究心理研究の最頂点に達したものといっていい。そして此(こ)

処(こ)には例の美文脈が全く跟(あと)を絶っている。警句や諧謔がたまにあっても、『猫』や『虞美人草』時代のような作者自身面白がっているような洒落や警句とはまるで違っている。厳粛である。陰鬱である。私の読んだ範囲内においては、この一篇が彼れの小説のうちで、最も通俗味の乏しいものである。読者の好奇心を惹こうとする脚色ぶりは例の通りであるが、小細工はしないで、平押しに押して行っている。「私」という青年に取っての参考になると「先生の遺書」にいっているのが、青年の田舎の家庭の情況に照らして、何となく適中しているようでも

あるし、田舎の老父の重患と「先生」の自殺とが対脈的に人間の生存について読者の思いを致させるような書き振りは、彼れの他の小説のわざとらしい趣向とは格段の相違がある。

「悪い人間という一種の人間が世の中にあると、君は思っているんですか。そんな鋳型（いがた）に入れられたような悪人は、世の中にあるはずがありませんよ。平生はみんな善人なんです。少くともみんな普通の人間なんです。いざという間際に、急に悪人に変るんだから恐ろしいんです」という、この一篇の結晶として見るべき言葉を、前に引

用した鷗外のほこりとしていた仮面説と比べて見ると面白い。両者は相反しているようなところもあり、似通っているようにも思われる。『仮面』も、大学生である一人の青年に向って、主人公の信念が語られ、『心』も、大学生である一人の青年に向ってだけ、主人公の生死の秘密が洩らされている。ところで、鷗外はほこりを有って、青年の蒙を啓(ひら)く如くに語り、漱石は、「先生」をして妻にさえいわない心底を、委曲を尽して、青年にだけ語らせながら、「最も強く明治の影響を受けた私どもが、その後に生残っているのは必竟時勢遅れだという感じが

烈しく私の胸を打ちました」とか、「あなたにも私の自殺する訳が明らかに呑み込めないかも知れませんが、もしそうだとすると、それは時勢の推移から来る人間の相違だから仕方がありません。あるいは個人の有って生れた性格の相違といった方が確かかも知れません」とか、自己の強烈なる信念の発露についても、謙遜させている。漱石には、執筆にあたって、移り行く周囲の風潮を顧慮するところがあると、私がいった所以である。

『彼岸過迄』には一端を現していただけの嫉妬が、『心』においては、最も熱心に追窮されている。財産に関する

暗闘、親類縁者の反目、嫉妬、孤独感などが、在来の彼れの作品に見られないほどに強く、陰鬱に書かれている。いろいろな人々の心理を研究して、ついにどん詰まりまで来たようなものである。

そこで、彼れは、『心』の次には、『道草』を書いた。この小説は彼れの自叙伝らしく思われるが、この自叙伝小説を読むと、今までの彼れの小説の人物について思い当るところが少なくない。

『道草』読後感は、私は去年読売新聞に掲げている。

最後の大作『明暗』は、永久に未完のままで残されて

いる。結末に近づくほど波瀾を起させるのが、彼れの創作の慣例になっているので、『明暗』は、どう発展して完結するのか、読者には想像がつかないのみならず、作者自身の意図もハッキリしていなかったのじゃないかと思われる。そして書き残された範囲においての『明暗』は、少し箍(たが)がゆるんでいるような感じのする作品である。運びがまどろこしく退屈だ。しかし、お延(のぶ)とお秀(ひで)などの女性は、よく描かれている。これまでの彼れの小説には、多くの女性は、断片的に現されているか、あるいは型に入ったように現実味を欠いでいたが、お延とお秀と、吉

川夫人とは、充分に現実の女らしい羽を拡げて羽叩さしている。

「真昼間提灯(ちょうちん)を点(つ)けて往来を歩くのは、世の中の暗黒な所を諷した皮肉な仕事と取れば、取れないこともあるまいが、一方からいえば、鬘(かつら)をつけて花見をすると同一の気楽さから出ないとも限らない。花見の趣向などは現在に満足を表わす程度の尤(もっと)も甚しいもので、不平や諷刺の表現でないことは明かである。現に『ドンキホテ』なども、多数の評家は諷刺と見ているようだが、私には

花見の鬘同様な感がある。」

漱石はこういっている。我々が彼れの作品に対して、事々しき穿鑿（せんさく）を試みるのも、花見の鬘同様なものに殊更らしく深刻な意味を附することのように、彼れには思われるかも知れない。

ところが、漱石自身は、『明暗』においても、小うるさいくらいに、心理の穿鑿（せんさく）に従事している。作中人物は、互いに相手の目叩（またた）きの数までも数えて、それによって相手の心理を批判するといった態度で、そのために作の進行がのろく、かつ実感が水っぽくなるのである。人物の

筋肉の微動にも、一ページも書き続けられるほどにその人の心の表現が籠っているらしく見られているのだ。漱石の面前では、うっかり痒(かゆ)いところをちょっと掻く訳にも行かないようである。

しかし、『明暗』には、我々が日常見聞している平凡な現実生活の真相が多分に出ている。書き残されている範囲内でいえば、異常な事件がない。この作者には免れがたい癖であったロマンチックな取り扱い振りがない。詩がなくなっている。『三四郎』よりも『門』よりも、どれよりも平凡な筋立てで、人物も事件もそこらにあり

そうに思われる。兄嫁と小姑（こじゅうと）、若夫婦をつついて喜んでいる意地悪い中年女の交渉は、微細に渡って実相が描かれている。私は、『明暗』まで読んで、はじめて、漱石も女がわかるようになったと思った。老いたる彼れは、もう『草枕』にあるような詩的女性を朦朧（もうろう）と幻想し得られなくなったのであろう。鏡花式の夢から醒めて現実の女を見るようになったのであろう。それ故『明暗』は、運筆の点では作者老衰の兆が見えるにしても、意義のある作品たることを失わない。

もう一つ面白いのは、この最後の小説のなかに、小林

という皮肉ないやがらせをいう変な男が抛(ほう)り出されていることである。ニルアドミラリの域に達しているという『それから』の代助にちょっと似ているところがあるが、代助は、要するにブルヂョアのノラクラものである。小林は、卑俗であるが、自棄的闘志を持っている。プロレタリア意識をもってブルヂョアに反抗している。有産階級が彼れを侮蔑するなら、彼れも有産階級を侮蔑してやる、復讐してやるという反抗心を有っている。漱石の作中に、皮肉揶揄(やゆ)反抗の気分は珍しくないが、プロレタリア意識を持った皮肉揶揄反抗は珍しい。

彼れの作品の殆んど全部を読み去り読み来った私は、最後の『明暗』において、こんな人間が、水に油を点したようにぽつりと現出しているのに、甚だ興味を感じた。漱石としては、柄にない人物を創造した訳で、取り扱い方も上手ではない。しかし、社会主義か共産主義か、そういった仮色(こわいろ)を使う人間を、ブルヂョア仲間へ割り込ませたところに、時代に関心する作者の気持が分るように思われる。

とにかく漱石は凡庸の作家ではない。私は未完の大作

『明暗』の最後の一行を読み終って、この作者の一生を回顧した。そして、例の「標紗玄黄外、生死交謝時、杳然無寄託、懸命一藕糸……」という彼の病中の詩を思い浮べた。

今夜は波の音が高い。（四月十八日、大磯にて）

右の如く漱石論を書いてしまったところへ、手許に書物がなかったために読み落した『行人』がふと手に入ったので、ついでに速読することにした。

例の如く読者をもどかしがらせる小説であるが、前半

は読者を惹きつける力をもっている。弟に対する兄の疑惑には深刻性が含まれていて、弟と兄嫁とが暴風雨の夜和歌山の宿に泊るあたりは、異常に、緊張しているが、それから後は、甚だしく気が抜けている。中心を逸して、徒(いたず)らにまわりを廻ってばかりいるような小説である。くどくってまどろこしくて、読後の感銘が甚だ薄い。漱石にも似合しからざる小説である。彼れの哲学観宗教観が窺われないこともないが、それが乾燥無味な叙述に終っている。この長篇執筆中、作者は病気をして一時稿を中絶させているが、作品の不出来なのはそのためかも知

れない。

この小説は、『彼岸過迄』と『心』の間に作り上げられたのであるが、これら前後の作品と連関させて考えると、この作者がいかに、男女関係についての暗い心理に思いを致していたか、またそういう暗い気持から脱却するためにはいかに苦闘しなければならぬかと、思いを潜めていたことが察せられる。……芸術として劣っていてもその点では興味がある。

小宮豊隆君は、漱石の修善寺（しゅぜんじ）における大吐血を以って、彼れの生涯の転機としているが、それはそうかも知れな

い。しかし、大吐血後の漱石が前期の彼れよりも、人生の見方が一層温かになり、一層寛大になったとは思われない。かえって反対ではないだろうか。『心』『行人』『道草』『明暗』がそれを証明している。他人の心の暗さ醜さを傍観的に描いたというような空々しいものではなくって、これらに現れているいろいろな疑惑は、作者自身の心に深く根を張っていたのじゃないかと思われる。そして、大病前の作品よりも洒落っ気が少なくて、一貫した真面目さがある。『坊つちゃん』時代の薄っぺらな明るさが影を潜めて、懐疑の深さが見られるように

なった。

『思出すことなど』のうちの病床感想に、知友門下生愛読者などの好意に感激して、「世の人は皆自分より親切なものだと思った。住み悪(にく)いとのみ観じた世界に忽(たちま)ち暖かな風が吹いた」といい、「四十を越した男、自然に淘汰せられんとした男、さしたる過去を持たぬ男に忙しい世が、これほどの手間と時間と親切を掛けてくれようとは夢にも待ち設けなかった余は、病に生き還ると共に、心に生き還った……」ともいっているが、こういう言葉は、大抵の病人が回復後に起す感傷語であって、特別に

意味の深い言葉とは思われない。それに「さしたる過去を持たぬ男」といっているのは、漱石の謙遜した言葉であって、もし彼が作家として名声を博していなかったなら、あんなに賑やかに彼れの病床が顧みられようはずはなかった。

人間は気力の衰えた時には、年甲斐もなく、いやに感傷的な言葉を吐きたがるものである。「人の死せんとするや、その言ふことや善し」というのも、畢竟（ひっきょう）は、気力の衰えをさすに過ぎないことがある。……『心』『行人』『明暗』など、漱石晩年の作品に、私は、彼れの心

の惑いを見、暗さを見、悩みをこそ見るが、超脱した悟性の光りが輝いているとは思わない。

日本文学電子図書館

作家論

著　者：正宗白鳥
制作者：宮澤一郎
出版社：岩波文庫、岩波書店
2002年６月14日 第１刷

日本文学電子図書館